

## エゾイラクサ *Urtica platyphylla* Wedd.

イラクサ科 Urticaceae

1. 利用対象部位：韌皮繊維

2. 組織形態：

雌雄同株の多年生草本で高さ 2m ほどになる。茎は下部で太さ 1.5cm 程度、断面四角形～円形、髄は中実で髄腔とはならない。表皮は 1 細胞層で鋭い刺毛と短毛を持ち、クチクラは薄い。下表皮は数細胞層、その内側に薄壁で大形の細胞からなる柔組織があり、更にその内側に韌皮繊維がある。韌皮繊維は皮層と一次篩部間に発達するが、多数の柔細胞と混在していて、繊維細胞は断面多角形、単独あるいは 2～10 細胞が互いにくっついて繊維細胞塊となるが、アサのような大きな塊とはならない。繊維細胞はほぼ全周的に形成されるが、維管束間部分では途切れる。一次組織の分化に引きつづいて形成層が活動し、二次篩部を作るが、二次篩部には繊維組織は形成されない。

アイヌは秋枯れの茎を刈り取り、乾燥させ、叩いて繊維をとって糸にし、布を織った（福岡 1995）。また、ムカゴイラクサからも繊維を採り、糸にしたという。エゾイラクサの繊維細胞は 2～10 細胞程度がくっついて小さな繊維細胞塊になってはいるものの、繊維細胞塊の間には柔細胞があるので干した茎を叩いて繊維を採ると繊維細胞はバラバラになる。

3. 利用例：糸、織物など

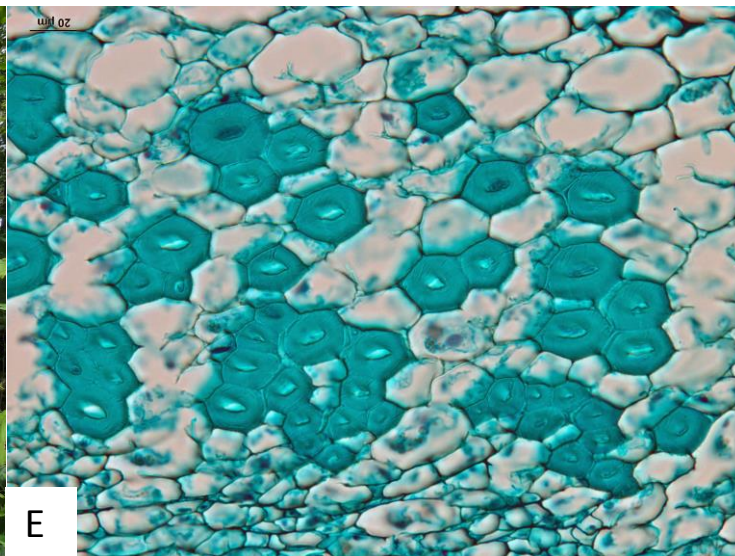
4. 遺跡出土遺物：布目（1992）は福井県の鳥浜貝塚（縄文時代前期）の「アンギン様編物」および縄、山形県高畠町の押出遺跡（縄文時代前期）の「アンギン様編物」、金沢市の米泉遺跡（縄文時代後期）の「アンギン様編物」などを「アカソ」と報告している。鈴木ら（2017）は青森県に目屋村の川原平（1）遺跡（縄文時代晩期）の漆漉し布 3 点について、カラムシ、アカソ、イラクサなどを含めた意味での「イラクサ科の繊維」と報告している。

鈴木三男・能城修一・小林和貴・佐々木由香 2017. 「木質遺物・繊維製品の素材植物同定」 青森県埋蔵文化財センター『川原平  
(1) 遺跡Ⅷ』  
福岡イト子 1995. 「アイヌ植物誌」 草風館.





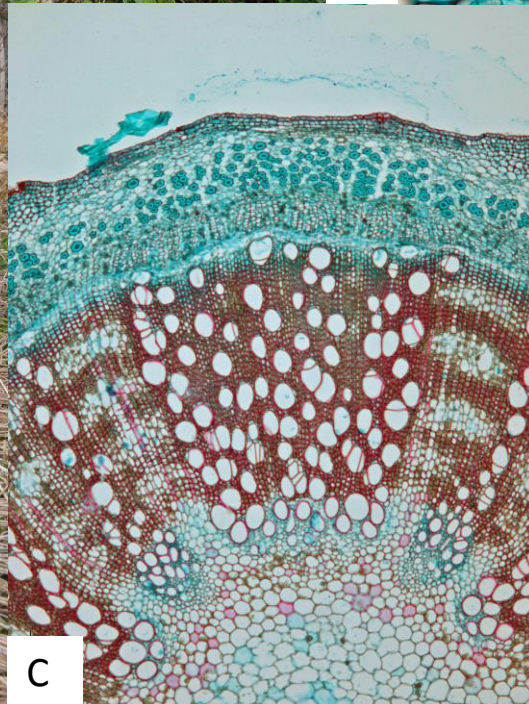
A



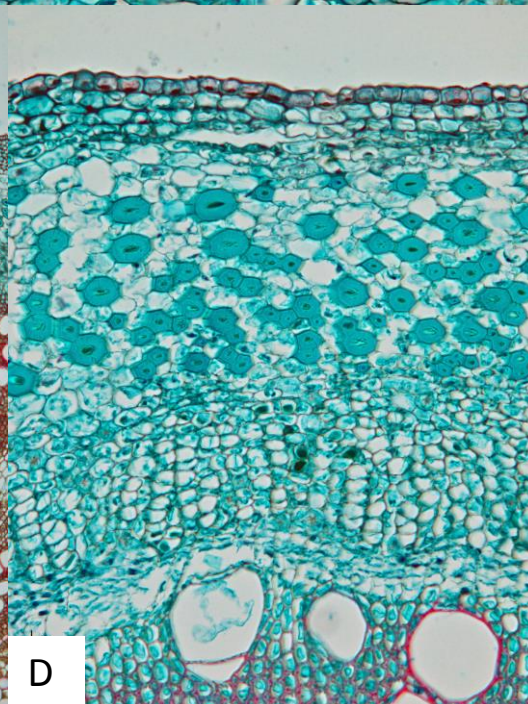
E



B



C



D

A&B:花期と秋枯れのエゾイラクサ(北海道標津町)。C&D:エゾイラクサの茎の横断面とその拡大。表皮は1細胞層でクチクラは薄い。Dの表皮の下には周皮が分化しかかっている。周皮都市部の間に靱皮繊維差がある。E:靱皮繊維。繊維細胞は柔組織と混ざって存在し、断面多角形、単独か2~10細胞程度が集合している。